

『響きと怒り』 その二

——第三章と第四章について——

本 間 武 俊

私にとっては、ジェイソンは徹底した悪を表す人間でした。彼は私が思いついた人間の中でも一番冷酷な人間といえるでしょう¹。

第一章のベンジーと第二章のクエンティンの独白、そして第四章の復活祭の日曜日のディルシーの人間像に対しては多くの批評的関心が払われてきた。それに比べると、第三章のジェイソンに払われてきた批評的関心は著しくバランスが欠けていると思われる。言うまでもないことだが、ある登場人物が悪人として設定されているからといって、作品内におけるその人物の重要性がそれだけ少なくてもよい、ということにはならない。『響きと怒り』の四章構成（三つの独白とひとつの客観描写）という特殊な形式から見ても、パロディー、アイロニー、パラドックスなどが多用されている点から見ても、ジェイソンの章とクエンティンの章に軽重の違いは無いと考えるべきであろう。事実、フォークナー自身もジェイソンの章をこの作品における「カウンター・ポイント（対位法）」²と呼んでいる。確かに、ジェイソンはフォークナーが創出した人物の中でも、最も生き生きとユーモラスに描かれている人物である。少なくともこの小説の中では一番実在感を感じさせる人間である。彼の独白の語り口は主として口語による。その野卑であるが、自由奔放で饒舌な語り口は、それに先立つベンジーとクエンティンの独白と著しい対照をなす。それ故、ジェイソンの独白がこれら二つの独白をアイロニカルに照射するものであると考えられるのである。

互いの基本的行動や発想法に相同性があるからといって、そのことによって登場人物同士が互いに結びつけられていることを意識している必要は無い。ここでは、ジェイソンの独白とクエンティンの独白が同じコインの裏表の関係にあることを見て行きたい。

(一)

ジェイソンの独白に割り当てられた 1928 年 4 月 6 日、という一日のジェイソンの行動を追って見れば、朝から姪のクエンティンが学校をサボって遊び

歩いていることで母親が愚痴をこぼすのを聞かされ、姪と口論した挙げ句、彼女を車で学校まで送り届ける。それから郵便局で郵便物を受け取り、遅刻してアールの店に出勤する。店で黒人の下働きのアングル・ジョブをからかってから、姉のキャディが母親に宛てた手紙を開く。毎月の一日に送ってくるはずの小切手（姪の養育費）が六日に届いたと文句を言う。

10 時頃、外へ出てセールスマンと無駄話をしてから電信局へ行き、綿相場の売り買いをして店に戻る。イースターを当てこんだ旅回りのショーがかかっているので、町には近在からの人出が多く、アールが忙しくたち働いている。それを尻目に、情婦から来た手紙を読んだり、父の葬儀の日にキャディを騙して大金をせしめたことなど、昔のことを思い出したりしながら、これといった仕事もしない。キャディのクエンティン宛ての手紙を開くと、中に入っていたのは小切手ではなく、50 ドルの郵便為替が入っている。母を騙すための偽の小切手を作ろうと思った矢先に、クエンティンが入ってきて、郵便為替を奪い取ろうとするが、10 ドルと引き替えに彼女に為替の裏書きをさせ、追い払う。

正午頃、偽造用の小切手帳を苦労して見つけ、偽小切手を書き、母親に用があると行って店を抜け出し、綿相場の値動きを見てから、家に帰る。家では母に偽小切手を燃やさせ、食事をすませてから町に戻る。途中、銀行に立ち寄ってキャディの小切手と郵便為替を貯金し、再び綿相場の値動きを見に電信局によって、店に帰る。

午後、クエンティンが赤いネクタイの男と町を歩いているのを見かけ、後を追うが見失う。店に戻る途中、証拠金切れを伝える電報を受け取る。再び車で家に戻り、溜め込んである隠し金を調べる。車で町に戻る途中でクエンティンが例の赤いネクタイの男と乗っている車に出会い、追跡するが、ままと撒かれてしまうばかりでなく、タイヤの空気まで抜かれ、ひどい頭痛に苦しみながら町に戻る。店に帰る途中で、相場が下落して 200 ドルも損をしたことを知らされる。

夜、家に帰ってからは、アールからもらったショーの入場券を、ショーに行きたがっているラスターの目の前で、意地悪く燃やしてみせる。その後で、夕食に下りてこない母親とクエンティンを無理に下りてこさせ、食卓ではあたかも家長然としている。また朝と同じように姪と口喧嘩し、母親の愚痴を聞き、その後で自室に引き籠って、上機嫌に金の勘定をする。

ジェイソンの独白の特徴は、“I say”, “like I say”, “what I say”, などの

決まり文句が必ず付加されていることにある。さらに、ベンジーやクエンティンの独白と著しく異なる点は、ジェイソンは語っている自分をはっきりと意識し、同時に、暗黙の聞き手（他者）の存在を前提にしていることである。彼の独白には代名詞“you”が多用されているからだ。この代名詞にはジェファソンの市民やジェイソン自身も内包されているが、当然その指示対象として読者も含まれる。こうした内包された聞き手（他者）に向かって、ジェイソンは自己を主張し、彼らを説き伏せて、自分の考えに同調させようとしている。しかし彼は自己主張をする一方で、そうした自分自身を反省的に振り返ることを決してしない。だから、こうした自己主張はいわば不在の他者に向けられているのも同然である。

ジェイソンの語りは伝統的な語りであり、出来事は時間的な順序で語られている。従って、彼の章に先立つ二つの章で断片的に語られていた、曖昧な出来事は明確に語り直され、脈絡づけられて、コンプソン家の没落が詳細にわたって明らかにされる。しかしながら、ジェイソンは信頼できる語り手ではない。彼は人間嫌いであり、情け容赦なく人間の愚かしさや弱点を暴く。彼の毒舌は人間に対する軽蔑と憎しみを表している。しかし、こうしたジェイソンの語りには不思議な説得力があり、読者は彼に反撥し、彼を軽蔑しながらも、同時に彼に引きつけられていくのである。

主題の点から言えば、前の二章とジェイソンの章との間には断絶はない。主題の扱い方に大きな違いがあるだけだ。ジェイソンの独白の中心にも、姉のキャディの存在、昔の彼女との関係がある。ベンジーがキャディに示した愛、クエンティンが抱いていた愛／憎しみに対して、ジェイソンが抱いているのは憎しみだけである。それでも彼女にまつわる記憶は、今なお、ジェイソンの心を疼かせている。彼にとってもキャディは不幸の元凶なのだ。姉の婚約者のハーバート・ヘッドがジェイソンに約束していた銀行のポストは、彼女の不義のために、取り消されてしまった。だから、キャディの不義の娘、つまり姪のクエンティンは、彼にとって、失われた銀行の職を象徴するものとなり、彼は、毎月キャディが養育費として送ってくる金を、偽造小切手を用いてくすねては、溜め込んでいるのである。彼はこの貯金のなかにすべての悔恨を閉じ込めているのである。第二章で父親がクエンティン（ジェイソンの兄）に、「おまえは挫折の象徴を永遠の中に運び込もうとする」（129）と言っていたが、姪のクエンティンはジェイソンにとって正に「挫折の象徴」である。

ジェイソンは姪を憎み、彼女に酷くあたるので、彼女を不良少女にしてし

まう結果となる。彼は「血は争えない」(297)と言って、姪の不品行を遺伝によって説明しているが、この言葉がとりもなおさず、彼自身にも跳ね返って来ることを知らない。彼は自分だけは、コンプソン家の人々とは違い、ただ一人正常な分別を具えていると自負している。また母親も、彼だけが彼女の実家のバスコム家の血筋を引いているとして、事あるごとに、彼がコンプソン家の人間と違うことを強調している。しかしながら、彼がいくらコンプソン家の血筋を否定しようとも、姪の行動を目の当たりにすれば、どうしても姉のキャディを思い出させられ、キャディの過去に拘らざるをえないのである。だから彼は絶えずコンプソン家の男としての責任や義務を意識させられているのだ。

ジェイソンは自分が世故にたけた男、実務肌の男であると自認し、世間の荒波を乗り切って生きていると自負している。一見すると、彼は冷静で合理的な男のように見える。しかし、これは真実ではない。こうした自認、自負が彼の自己幻想にほかならないことは、彼自身の行動が証明することになる。抜け目のないビジネスマンであるはずなのに、彼は常に現実の後れを取る。変化する現実に対処する時に、彼は自分の無能力、不適格性をさらけ出してしまうのだ。それは、ジェイソンもまたクエンティンと同様に固定観念やオブセッションに取り憑かれているからである。彼は自分を独立独行型の人間であると信じ、世間を渡るには自分一人の力を頼みにし、他人を当てにしてはならず、他人の思惑や感情は考慮に値しないと信じている。彼は、人間とは偶然に支配されているのであり、そうした人間の価値を決めるのはその人間が頭脳と手によって獲得したものだけであると信じている。彼は、永遠不変なもの、絶対的なものに憧れたり、そうしたものを信じたりしない点において、彼の兄のクエンティンの対極にある人間のように見える。

しかし、こうした彼も、クエンティンと同じように、父親の人生観に決定的に影響されているのである。彼は父に対しては一片の尊敬も抱いていない。しかし、父親の敗北主義的な皮肉な人生哲学はジェイソンの人生観と人間観を雁字がらめにしており、彼の行動の基盤になっているのだ。第二章において、父親はクエンティンに向かって、彼がこだわっているのは永遠とか理想の極致というものであると揶揄し、一方で「あらゆる人間の額に影を落としている自然の事件の因果関係」(220)を忘れてはならないと論じていた。父親の考えでは、人間の悲劇的行為も崇高な感情も有限な意味しか持たないのであり、従って人生とは「恐るべきサイコロ師」(221)が采配する、意味のない偶然というゲームにほかならない。父親のこうした人生哲学を、徹底的

に下品に焼き直したものが、ジェイソンの行動を支えている。勿論、ジェイソンにはそんな意識はない。

父親から受け継いだ相対主義と有限性の観念は、ジェイソンにおいては融通性を欠いた、固定した行動規範と化してしまい、彼の行動を縛っている。第四章のイースターの日曜日に、ジェイソンは、彼の溜め込んだ金を盗んで男と駈落した姪を捕えようとして、狂ったように車を走らせながら、今まさに「運命（サーカムスタンス）の後衛部隊」をやりすごし、「必要とあらば全智全能の神をその玉座から引きずり降ろす」（382）自分の姿を幻想している。このなかで、ジェイソンは自らを全智全能の神に比すべき、唯一無二の存在にまで高めている。これは一つの唯我論的な誇大妄想にほかならない。こうした自己幻想のなかにジェイソンのナルチシズムを見ることができるのである。こうして彼もまた、クエンティン同様に、紛れもなくコンプソン家の血筋の人間なのだ。だが「運命の後衛部隊」は彼のすぐ後ろに控えていた。ジェイソンは全能の神に挑戦するつもりで意気こんでいたのに、樟脳を滲み込ませたハンカチーフを忘れてきたことに気づく。ガソリンの臭いで頭痛が起きるので、彼は樟脳を滲み込ませたハンカチーフを常に持って遠出することになっていたのだった。彼はせっかく掴みかけた勝利に裏切られたと思う。前の日に、ショーの男と遊び回っていた姪を追跡した時にも、ハンカチーフを忘れて頭痛を起こしたのだった。

クエンティンは“the loud, harsh world”（220）を超越する可能性を考えていた。一方、ジェイソンはこうした世界を決してよしとするわけではないが、この世界の中で成功することを目論んでいる。クエンティンがロマン主義的で観念的であるとすれば、ジェイソンは現実主義的である。しかし彼らの観念論も現実主義も見せかけにすぎないのであって、その下には、それぞれ似たような自己陶醉的な傾向と自己欺瞞が潜んでいる。二人は共に他者を執拗に拒絶し、自分たちの自己愛的世界を危うくするものには、激しく敵意をあらわにする。他者に対するジェイソンの敵意はところ構わず頭をもたげる。彼は店の雇い主のアールを嘲る。客には人を小馬鹿にする態度で接する。相場の変動をそのつど知らせてくれなかった、と言って、電信局員を詰る。外の世界のあらゆるものは不合理であり、彼を絶えず裏切ろうとして虎視眈々と待ち構えている敵である。外の世界はこのようなものとして彼の目に映っているのだが、実は、こうしたことは全て彼自身の悪意に満ちた人間観や彼自身の衝動を他人に投影したものにほかならない。

彼は人種差別主義者である。黒人やユダヤ人や外国人を毛嫌いし、軽蔑し

ている。彼は人種的偏見や先入観（恐らく彼独自のものではなく、彼が生きている社会が押しつけたもの）によって、人間を独断的にいくつかのステレオ・タイプにはめ込む。例えば、ユダヤ人は金儲けの才があり、社会の寄生虫のような人間である。黒人は怠惰で泥棒根性の持ち主である。こうして他者をステレオ・タイプ化し、固定した枠にはめ込むことによって、自分の優越性を確かめ、ひたすら空しい自己満足に浸るばかりである。つまり、彼は本当の自己を知る機会を自ら失っているのだ。

ジェイソンは、人間と人間に関するあらゆることは絶えず変化する、と考えている一方で、人の性格を永遠に変わらぬものと見なし、人の日頃の行動からその人の将来までも予知できる、と信じている。これはジェイソンにおける一つの矛盾である。

いったん売女に生まれついたら一生売女だ、と俺は言うんだ。（223）

絶えず変化し、従って先が読めない世界の中であって、ジェイソンはこうした独断的な人間観によって人間を分類している。言い換えれば、自分に都合の良い一面だけを拡大解釈して、それによって強引に他者を規定し、そして自己をも規定するのである。他者を正確に理解できなければ、自己も正しく理解できない。自己理解とは同時に他者理解である。これらは相即的、同時的な出来事（体験）である³。固定的で偏った他者の捉え方が自らにも跳ね返ってくることを、ジェイソンは分らない。ジェイソンの独白の見事なアイロニーの一つが、これである。彼の独白は多分に一人芝居的である。他人の行動についての予測に正確さを欠き、従って自分の先入観や偏見に裏切られても、彼はこうした行動しかできない。そして、自分の行為の滑稽さを痛切に意識させられる度に、彼が自分について如何に無知であったかをさらけ出す。彼は、「金には何の値打ちもない。ただその使いみちが問題なんだ。金なんて誰のものでもないんだから、溜め込む必要なんて一体どこにある」（241）と一方で言っておきながら、彼自身が姪の養育費をくすねて溜め込んでいるのだ。

しかし、ジェイソンは自分の行為が他人の目にどのように映っているかに、常に気を取られているため、立ち止まって、自分を駆り立てている衝動が何であるかと、考えてみるゆとりがない。ショーの男と遊び回っている姪の後を追いつつ、その時の自分の姿を彼は次のように思い描いている。

二人が角を曲った時に、俺は飛び出して、後をつけた。俺としたことが昼下りだというのに、帽子もかぶらずに、横町をあっちこっち追っかけ回さなければならないなんて。これもみんなおふくろの面子のためなんだ。いつも俺は言うんだ。ああいう女は、いったんああいう性に生まれついた以上、どうしようもないんだ。それはあいつの血のせいなんだから、こちらからは何とも出来やしない。ただ一つ、あいつを追っぽり出して、さっさと似たり寄ったりの連中と一緒にさせること。ただそれしかないんだ。

表通りまで出たが、やつらの姿は見えない。そして、俺はといえば帽子もかぶらず、まるでこちらまで気がふれたみたいな格好で、ぼうっとつつ立っていたのだ。世間の連中がそう考えるのも無理はない。あの家では、一人はキ印、もう一人は投身自殺、もう一人は旦那に追い出されたってわけだから、残りの一人も気が変でないわけがないじゃないか。いつだって、俺には分かっていたのさ。世間の連中が鵜の目鷹の目で俺を見つめながら、こんなことを言える機会を待ち構えているんだ。いや別に不思議でも何でもありませんよ、わたしは前々から思っていましたよ。あの家族はみんなキ印なんですよ、と。

(289—290)

たとえ他人の目にジェイソンが気違いには見えなくとも、それでもジェイソンの心の中はまともではない。第二章のクエンティンのように、ジェイソンの精神もまた一種の錯乱状態にある。彼は他人ばかりでなく自らの愚行や無能を冷静に見通すことができるにもかかわらず、どうしても理性的な行動をとれないのだ。

俺がいつも言うとおりの、血は争えないものだ。もし、身体 (you) にああいう血が流れていたら、何をやらすか知れたもんじゃない。俺は言うんだ、あの娘に対してしてやらなければならないことがあると、お母さん (you) が信じているにしても、そんなものはとっくの昔に帳消しになっているんだよ。今からは、もう自分 (you) だけが悪いということになるんだよ。なぜって、分別のある人間ならどうするか、お母さん (you) だって知っているはずでしょう。

(297)

この引用文の中で使われている代名詞の 'you' は多義的である。ジェイソンが意識していようがまいが、この 'you' は母親ばかりでなく、彼自身にも言及しているように読めるからである。特に、「分別のある人間ならどうする

か、お母さん (you) だって知っているはずでしょう」の 'you' は暗に彼自身を指示していると読める。しかし、彼の言うとおりに、彼を真に分別のある人間だと考えることはできない。彼には分別などはない。また、経験から学ぼうとする柔軟さも、彼にはない。ジェイソンの頑な性格は兄クエンティンの頑なさにも通じている。こうした彼らの頑なさは、作者が "the blind, self-centeredness of innocence"⁴ と呼んでいるものを思わせる。ジェイソンは利己的で独占欲が強く、従って自己主張も強烈である。しかし、主張している自己を反省するということがない。つまり、彼には自分に対する自覚的な関係、自己に対する反省的な関係というものが無いのである。子供が成長するとともに、自己愛が自己主張に、自己主張が他者との関係において反抗という型を取ることがある。ジェイソンはこの反抗という段階に留まっているように見えるのだ。

ジェイソンの頑なな性格は、しきりに繰り返される、"Once a bitch always a bitch", "Like I say once a bitch always a bitch" などの決まり文句で始まる自己主張にうかがわれる。また彼の分別のなさ、ヤンキーズには賭けないという彼の言葉によく現れている。

「ところで、」とマックが言う。「きっと、あんたは今年はヤンキーズに賭けてるんだろう？」

「なんのために？」と俺は言う。

「ペナントさ」とやつは言う。「リーグじゃあヤンキーズに勝てる場所は一つもないぜ」

「一つもない、馬鹿言え」と俺は言う。

「ヤンキーズもガタが来てるさ」と俺は言う。「一つのチームがあんなにいつまでもツイてられるかよ？」

「あれがツキだなんて、俺は思わないよ」とマックが言う。

「あのルースなんて奴がいるチームには賭けたくない」と俺は言う。「初めから勝ちそうに決まってるもだ」

(314)

このように、ジェイソンは、どこから見ても理にかなっていることでさえも、つかの間の意味しか持たない、いつまでも続かないものと見てしまうのだ。だから、彼の自慢の合理的ビジネス感覚を有効に発揮する機会を自ら失ってしまうことになる。彼は実現可能な目標でさえも絶えず取り逃がす。黒人のジョブが言うように、ジェイソンは自分が誇る利口さに足を掬われている

のだ。「あんまり利口すぎて、自分にさえ追いつけねえ人だって、おめえさんはだませるだからな。(それは)……ジェイソン・コンプソンの旦那のことでさ」(311—312)と、ジョブにまでからかわれる始末である。

(二)

ジェイソンは性差別主義者でもある。女のあしらい方を心得ているつもりになっているが、実は、彼にとって女性は、兄のクエンティン同様、理解し難い他者である。女性の行動はジェイソンの予想を絶えず裏切る。女性の発想や論理はジェイソンにとって謎であり、非合理である。従って、女性はジェイソンの計画の遂行を阻害する最大の敵であり、脅威である。この小説のなかで、ジェイソンは二回にわたって女に裏切られ、あざけられ、彼の計画は頓挫させられる。一回目は、キャディによって決まりかけていた銀行の職を失ったことであり、二回目は、失った銀行の職の埋め合わせとして、キャディが送ってくる娘の養育費をくすね溜め込んだ大金を、キャディの娘によって持ち逃げされることである。

兄のクエンティンはキャディを *inviolable virgin* として理想化しようとした。彼女の *virginity* は、彼が自己同一性を維持するための、不可欠の条件であった。それに対して、ジェイソンはクエンティンの抱いていたそうした聖処女のイメージをひっくり返している。彼にとって女とは「売女」か、でなければ彼のメンフィスの情婦のように「正直な娼婦」(291)のいずれかでしかない。いずれも、クエンティンが *inviolable virgin* という仮面の下に隠しておきたいと願った、女性の一面である。ところで「処女」にせよ「売女」にせよ、こうした女性像は男の眼によって一方的に、独断的に捉えられたものであることは言うまでもない。つまり、クエンティンもジェイソンも女を一人の十全な人格を具えた人間として理解していないのである。彼らは男の幻想や恐れを女に投影しているだけである。そして、ジェイソンの女性観はクエンティンの理想とする女性像の裏の面をアイロニカルに照らし出すものとなっているのである。

ジェイソンと姪の関係とクエンティンとキャディの関係との間には、相同性があり、前者は後者のパロディーになっていると考えられるのである。学校をさぼり、男たちと遊び回っている姪のことが常にジェイソンの念頭にある。このことはクエンティンが、男と乱脈な交際をつづけるキャディに悩まされていたことに対応する。クエンティンが妹の純潔を重んじたのは、それが彼の自己愛的世界像の不可欠の要素であったからだが、ジェイソンが姪の

不品行を問題にするのは、彼が社会的体面を重んじるからだ。彼は姪と遊び回る若者を、“those damn town squirts” (243) と罵る。一方、クエンティンはキャディに向かって、“It’s for getting it be some damn town squirts I slapped you” (166) と言った。どちらの場合にも “damn town squirts” という言葉が使われていることに注目したい。ジェイソンにとってもクエンティンにとっても〈性〉は罪であり穢れである。ジェイソンは姪にたいして、

Are you hiding out in the woods with one of those damn slickheaded jelly beans? (229)

I am not going to have any member of my family going on like a nigger wench, (234)

と言うのに対して、クエンティンはキャディに向かって次のように言った。

Why must you do like nigger women……the dark woods hot hidden in the dark woods (113—114)

こうした女性に対する彼らの関わり方の相同性から、二人の兄弟の本質的な近さが明らかになるのである。

ジェイソンは兄クエンティンのロマン主義的観念論の空しさと否定的側面を暴く役割を持たされているのかもしれない。姪にたいしてジェイソンが抱いている憎しみが、彼女をグレさせて不良少女にしてしまった。彼女が、こんな女になったのはジェイソンのせいであると、彼をなじる場面がある (324)。姪に対するジェイソンのサディスティックな仕打ちを見ると、かつてクエンティンが、キャディが少年とキスをしたことを咎めて、彼女を殴ったこと (166) が思い出される。こうしたことから、クエンティンがキャディの純潔に示した異常な関心こそが、彼女を不特定多数の男との乱脈な関係に向かわしめた原因の一つではないかと思われ、改めて、クエンティンの責任が問われるのである。ジェイソンは正にクエンティンの陰画である。彼らの自己陶醉と自己欺瞞は、他人ばかりでなく彼ら自身にとっても破壊的である。彼らの相同性が一番よく表わされているのは、時間に対する彼らの態度である。彼らはともに時間を征服しようとして失敗する。ジェイソンはクエンティ

ンのように時計を壊したり、過去にとり憑かれていない。それでもやはり、ジェイソンは時間にとり憑かれていることに変わりはない。キャディのせいで奪われてしまった銀行の地位への思いが、痛手となって、今も疼いている。キャディは彼にとっても喪失の象徴である。しかし、彼はこの埋め合わせを未来に賭けている。つまり、クエンティンが過去に憑かれているとすれば、ジェイソンは未来に憑かれていると言えるだろう。ジェイソンは、過去の喪失を未来の成功によって、埋め合わせようと足掻いているのだ。そうしたジェイソンの悪足掻きは、時間に遅れまいとする彼の焦りに見られる。例えば、彼は家と店と電信局との間を忙しく行ったり来たりしている。そしてその間に、遊び回る姪を追跡し、同時に綿相場の値動きを掴もうとする。しかし、そのたびに彼にとっては思いがけないことが起きて、それが彼の足を引っ張る。実際に、彼が一か所に腰を落ち着けていられないので、相場の変動にはついていけない。値動きの情報は常に遅れて彼のもとに届けられるが、それは全て彼の責任である。彼は姪にも追いつけず、まんまと撒かれて、痛む頭を抱えて空しく店に戻る。またキャディの小切手が6日も遅れたために、偽造用の小切手を探して町中をうろつき回る羽目におちいる。このように、彼は時間と競走して、常に負けるのだ。この小説の題が取られたと言われる『マクベス』五幕五場におけるマクベスの独白が、ここでも思い出させられるのである。

明日が、その明日が、そのまた明日が
 一日一日とゆっくり過ぎて行き、
 やがては時の最後に行き着くのだ。
 昨日という日は、すべて、ばか者どもが土に返る
 死への道を照らしてきた。

ジェイソンもクエンティンも現在を愛していないのだ。言い換えれば、彼らは現在の生を本当に生きていると実感していない。特にクエンティンにとっては、現在は時間の中で次々と無に帰していく。すべては空しく過ぎ去る。時間はすべてを消滅させるのだ。だから、彼は人生の意味や根拠を、現在の中にも過去の中にも見いだせず、また未来にも目を向けることができなかつたために、自ら命を絶った。一方ジェイソンは未来に賭けていた。しかし、姪に金を盗まれ家出されてしまうことで、彼の未来も閉ざされてしまうのだ。

ここで再び第二章に戻って、クエンティンの時間意識と彼にとっての過去の意味を考えてみたい。

たそがれの中では あらゆる安定したものが影のような 逆説的なものとなり ぼくのしたあらゆることが影になり ぼくが感じたり 苦しんだあらゆるものが 奇怪な ひねくれた 目に見える形となって 嘲笑し 支離滅裂に みずから肯定してもよかったはずの意味を否定する性質をもってしまうのだ そしてぼくは考える ぼくは存在している いや 存在していない だれが存在していないのだ 存在していないのはだれ と
(211)

この引用から推測されることは、先ず、クエンティンが過去を無意味な断片として想起するだけで、意味あるものとして構成できないということである。「人間はその不幸の総和だ」(129)。つまりクエンティンにとって、過去は現在に生きる過去にはなりえていない。次に、過去の体験や自分の身体についての実在感や現実感が失われていることである。これは離人症患者の体験によく似ている。木村敏によれば、離人症患者は、「自己を失い、存在感を失い、時間を失っている。」彼らは、「外界の事物や自分自身の身体についての実在感や現実感、充実感……自己所属感などといった感覚が失われるだけでなく、なによりもまず自分自身の自己がなくなってしまった」と、その苦痛を訴えるという。患者は時間の流れを知的には理解しているにもかかわらず、その時間体験は独特であるとして、木村は、いくつかの例を挙げている。例えば、ある患者は「時間の流れもひどくおかしい。時間がばらばらになってしまって、ちっとも先へ進んで行かない。てんでばらばらで、つながりのない無数のいまが、いま、いま、いま、と無茶苦茶に出てくるだけで、なんの規則もまとまりもない」という。また別の患者は「時と時のあいだがなくなってしまった」という言い方で、時間経過が実感できないことを訴える⁶。

木村はまた、「分裂病者の時間」の中で、分裂病者に特有の共通点として、「患者の自己が確実な自己性を有していないという点」⁷をあげ、そのことは患者の幼児期以来の対人関係の持ち方と関係があると言う。つまり、幼児期に、子供の主体性や対人関係の能力を十分に育てないような、不幸な親子関係に置かれた場合に、将来分裂病になりやすいと言うのである。木村の説を引いたのは、クエンティンやジェイソンを離人症患者とか分裂病者と断定するためではない。しかし、時間感覚の異常と自己の非存在感（あるいは、不

確実な自己性)とは別々の経験ではなく、相即的なものである。これだけは押えておく必要がある。さらに、不確実な自己性が幼児期以来の対人関係(親子関係)の持ち方と関係があることも。

ぼくが小さかったころ、ぼくたちの本の中に一枚の挿絵がついていて、暗いところに一条の弱々しい光が、影の中に浮いている二つの顔に、斜めに射している。もしわたしが王様ならどうするかわかって? 彼女は女王だとか妖精だったことは一度もなく、いつも王様か巨人か将軍だった わたし あそこをこじあけて あの人たちを引っぱり出して 思いきり鞭でたたいてやりたいわ それはやぶれ、ボロボロになった。ぼくはうれしかった。ぼくは再びその絵の中に戻っていかなければならない そして しまいにはお母さんとお父さんが手を取り合って 上へ 弱々しい光の中に上っていき ぼくたちは二人の下の どこか低い 一条の光りも射していないところへ 迷い込んでしまう。(215)

フォークナーの小説の多くの主要な登場人物には「母親のいない子供」という特徴がある、としばしば指摘される。彼らは幼いうちに母親に死なれているか、そうでない場合には、彼らの母親はおよそ母親らしくない女である。しかし、母親の不在に言及するものは殆どいないのであるが、例外はクエンティンである。「ぼくにお母さんお母さんと言えるような母があったら」(213)。勿論、クエンティンには母親がいる。しかし、その母親(キャロライン・コンプソン)は彼の弟のジェイソンだけを偏愛し、白痴の息子ベンジーを一家の恥と見なし、そしてクエンティンやキャディに対しては冷たい母親である。おまけに、病弱で、心気症の気がある。こうしたことから、この家庭の親子関係も夫婦関係も、決して、暖かいものではなかったと、想像される。つまり、一家の子供たちは、幼児期以来、不幸な対人関係の中に置かれていたと想像されるのだ。

しかし、母親一人にすべての責任を被せるのは、片手落ちではなかろうか。Joan Williams は、長きにわたって貶められてきたキャロライン・コンプソンの名誉を回復しようと試みている⁸。ウィリアムズはキャロライン・コンプソンは南北戦争直後から1933年⁹まで、伝統的な南部女性として生きた女であり、その時代と場の産物であり、犠牲者であると捉える。彼女はこの小説の現在では、およそ60才と推定される。彼女は、小説の最初(第一章)に登場したときから、刺々しい女、騒がしい子供たちの声から逃れ、静けさと孤

独を求める、母親らしからぬ母親として現われる。しかし、少なくともジェイソンの雇主のアールや町の保安官は、彼女を‘a lady’と見なしている(283)。アールはジェイソンを解雇しなかったのは、キャロラインの心中を思ったからだ、と言う。保安官も彼女を気遣い、ジェイソンよりも彼女の立場を重んじているようだ(379)。

ウィリアムズは、キャロラインが1890年から1895年までの5年間に4人の子供を立て続けに産んでいたことから、彼女の病気がちの原因をヒポコンドリアにではなく、産後の肥立ちにあると推測する。また、彼女の実家はコンプソン家に劣る家柄で、彼女の結婚はいわば玉の輿に乗るようなものであったはずなのに、結婚生活は彼女に幻滅しか与えなかった、と言う。そしてウィリアムズは、彼女がほぼ等しい家柄の、生活力のある男と結婚していれば、こんなことにはならなかったかもしれない、と想像している。キャロラインは、姑の干渉と、夫の優越感と飲酒癖に耐えながら、妻として母としての努めを果たそうと、彼女なりに努力し、そのために力を使い果たしたと、ウィリアムズはキャロラインに同情している。だから、この一家の没落の原因を誰か一人に特定するとすれば、それは家長であるコンプソン氏にはほかならないと、ウィリアムズはコンプソンの責任を問う。コンプソンは、仕事らしい仕事もせず、酒に浸って、財産を食い潰したのであり、その点において、彼が軽蔑する義弟のモーリー・バスコムと同断である、とウィリアムズは言う。そして、コンプソンの時間論や、すべては幻影であり不条理だという人生観が、息子のクエンティンにとって何の助けにもならず、かえって彼に生きる意欲を失わせたように、コンプソンの人生は一家にとっても破壊的なモデルを提供した、と断じる。ウィリアムズはキャロライン・コンプソンを持ち上げすぎているように思われるが、それでも彼女の読みは示唆的である。つまり、これまではキャロラインに一家の不幸の責任を一方的に負わせるきらいがあったのだが、ここで新に彼女の夫の責任が問題にされているからだ。

フォークナーは1956年に、この小説は二人の女の悲劇であると語っている¹⁰。二人の女とはキャディとその娘クエンティンである。また、1945年にこの小説にAppendixを書いた時も、フォークナーはキャロラインには一言も触れていない。このことから、作家自身には彼女について付け足すべきことはもう何もなかったのだ、と想像される。つまり、フォークナーはこの小説を三人の女の悲劇としては考えていなかった、と言ってもよいだろう。しかし、フォークナーの意図の如何にかかわらず、キャロラインもまた一人の犠牲者と考えられるのだ。ウィリアムズが指摘しているように、キャロライン

にもいくらかの理があることを認めなければならない。

この小説のキャロラインと、次の小説『死の床に横たわりて』の母親アディ・バンドレンとの間には密かなつながりがある、とされている。二人とも実家の血筋を強く意識している。アディはジュエルという息子を、キャロラインはジェイソンを偏愛している。また、彼女たちの夫たちは家長とは名ばかりで、例えば、アディの夫のアンスは無能、怠惰、無責任な男で、家族の労働に寄生しているような父親であり、一方コンプソンは厭世主義者で生活能力のない夫であり、子供たちには寛容であったが、彼らには破壊的なモデルを提供しただけだった。アディの死んだ父親は、「生きるとは、長い間じっと死んでいられるように準備することだ」¹¹と口癖のように言っていた。アディは生前この言葉をよく思い出していた。彼女は父親のこの言葉に反撥し、本当の生を生きたいと願いながらも、彼女と夫アンスの現実生活は、こうした父親の言葉を裏づけるものにすぎなかった。彼女の生は生きながらの死にすぎなかった。アディの父の言葉はコンプソンの厭世主義、敗北主義の言葉、たとえば、「人間はその不幸の総和だ」(129)、「私たちはただ目覚めていてしばらくは邪悪が行われるのを見ていなければならないのだ」(219)などと符し合う。アディは父を憎んでいた。キャディもまた父と母を密かに憎んでいた(215)。キャロラインも夫に長い恨み言を言うところがある(126—128)。夫が彼女の実家を軽んじて、彼女の弟を軽蔑し、この弟に似ているジェイソンには冷たいと詰り、娘が家名を汚しているのを、手をこまねいてただ見ているだけだ、と言う。つまり、キャロラインはコンプソンが夫としてまた父親として、つまり家父長として欠格であると非難しているのである。第三章において、息子のジェイソンが演じる強い家父長の役は、こうしたコンプソンの戯画であろう。

『響きと怒り』と『死の床に横たわりて』を特徴づけるのは弱い父親の存在である。またこの二つの小説の前に書かれた、『サートリス』(もしくは『土にまみれた旗』)には父親も母親もいない。つまり、小説の現在においてはすでに物故している。これらの小説においては、弱い父親もしくは父の不在という状況もまた、子供たちの運命に深く関わっている。一方、他の作品には強い父親も多く見られる。総じて彼らは、娘を家に閉じ込める父親である。例えば、「エミリーへの薔薇」においては、町の人々は、エミリー・グリアーソンの父親が娘に言い寄る若者たちを皆追い払ったために、エミリーは三十を過ぎても独身でいるのだと、噂していた。『聖域』のルービー・ラマーの父親は娘の恋人を目の前で銃で撃ち殺してしまった。父親が頑なに娘の行動に

粹をはめようとする傾向、すなわち、娘を家に閉じ込める試みは、娘たちの将来に必ず禍根を残す。兄弟たちも、こうした父親たちと同類である。クエンティン、ジェイソン、『死の床に横たわりて』のダール、『八月の光』のリーナ・グローブの兄、『村』のジョーディ・ヴァーナーたちに共通するのは、妹の処女性と血統に対する頑な誇りである。父親と同様に、兄弟も妹に接近するよそ者を排除しようとする。男たちのこうした傾向の社会的な意味については、既に別のところで述べたので¹²、ここでは繰り返さない。しかし、女の処女性と貞操の強調は家父長制のイデオロギーから派生するものである。コンプソンはクエンティンに向かって、「[処女性]は女にとっては、男にとってよりも、意味がない」、「処女性を発明したのは男であって、女ではない」(96)と言った。だが、女とは男の価値体系や男が決めた行動規範を常に破る者である。それによって、男の自己完結した世界像（ナルチシズムに基づく幻想）に穴を穿つのである。男が女によってその自己幻想がはぎ取られ、自分自身の存在感を失って行く存在論的不安を主題とする小説が、この後、続々と書かれてゆく。『死の床に横たわりて』、『聖域』、『八月の光り』である。

(三)

フォークナーは、第四章を「ディルシーの章」と名づけている¹³。黒人女ディルシーは、この章で初めて老曝えた姿を赤裸に表す。彼女が湛えている悲劇的実在感や、彼女がこの章で果たしている役割の重要性は、確かに、否定できない。ディルシーは、主人たちに向かって、筋の通った堂々とした反論ができる黒人女であり、決して類型的な「黒人の婆や」ではない。そして、彼女が、没落と崩壊の最終局面にあるコンプソン家を、一人で辛うじて支えている。ディルシーは、感謝も報われることも期待せずに、家事一切を切盛りし、白痴のベンジーを初めとするコンプソン家の人々の面倒をひたすら見ている。だから彼女は、ほかの作中人物と比べて、強靱な精神力とか道徳的な力を表す者として、強調されてきたのであった。

だがディルシーは、第一章、第二章、第三章が、それぞれ、ベンジー、クエンティン、ジェイソンの章であったように、章全体を支配する主人公としての人物ではない。この第四章は、プロローグに相当する部分と三つの挿話あるいは三つの物語連鎖（narrative sequence）によって構成されている¹⁴。すなわち、330 頁—358 頁がプロローグ、358 頁—376 頁、376 頁—392 頁、392 頁—401 頁が物語連鎖である。そのうちでディルシーに特に焦点が当てられているのは、プロローグと二番目のシーケンスだけである。しかも、二番

目のシーケンスは三番目のシーケンスと、時間的には、パラレルである。二番目のシーケンスにおいては、ディルシーが彼女の家族とベンジーを連れて、イースターの特別礼拝が行われる黒人の教会へ行き、牧師の説教に感動し、感涙にむせびながら帰るまでが語られる。一方、三番目のシーケンスにおいては、ジェイソンが金を盗んで逃げた姪とショーの男を追うが、その甲斐むなしく戻ってくるまでの経緯が語られる。この部分では、すでに述べたように、ジェイソンが反キリスト的、流神的な誇大妄想を逞しくする。従って、こうした構成上の併置から見ても、ディルシーが第四章の主人公であるとか、彼女の存在が、その道徳的、精神的意味と力によって、ほかの人々を凌駕しているとは、俄かには断定できないのである。

冒頭に描かれているのは、ディルシーが、わびしい寒々とした明け方に、肌を刺す氷雨を避けて、戸口に佇む姿である。この描写に鏤められた撞着語法によって、一定の留保が判断に課せられているとはいえ、ここで描写されているのは、老曝えたディルシーの姿である。それは積年の労苦（時間）に磨り減らされた姿と言える。このプロローグにおいては、ディルシーの苦労のみが強調されているように見える。彼女の孫のラスターは言いつけた仕事を怠けるので、彼女は朝食の準備をしばしば中断せざるを得ない。ラスターのほかにもディルシーの仕事を邪魔するのは、キャロライン・コンプソンである。彼女は何回となく二階までディルシーを呼びつける。その度にディルシーは「ゆっくりと……、小さな子供がするように、片方の手で壁を伝いながら、一段一段と」(339)苦しそうに、階段を上り下りしなければならない。そして、キャロラインがディルシーを呼ぶ声は「機械のように規則正しく間隔を置いた」(337)「抑揚もなく、強調するでもなく、急ぐふうでもなく、まるで答える声にさえも耳を澄ましていないみたいな」(333)声だ。一方、ディルシーがいかにも辛そうに階段を下りていく足音は、凄じくのろのろとしていたので「狂おしいほど耳障り」(334)に聞こえる。キャロラインがディルシーを呼ぶ時の機械的な抑揚のない声と、ディルシーの凄じくゆっくりとした耳障りな足音は、この家に流れている時の鼓動のように聞こえるのである。

この家の食堂には、針が一本取れてしまったために、どことなく謎めいて不気味な柱時計があり、崩れかけた家の涸れかかった脈拍そのもののよう(335)、三時間遅れの時を刻んでいる。この時計は、まず咳払いみたいな音を立ててから、時を打つが、ディルシーはその度に正しい時刻を言い当てる(342, 375)。クエンティンは、すべてを帰無する時間から逃れようとして、時計の針を引きちぎり、自殺したのであった(第二章)。一方ディルシーは時

間の中で生きること何ら矛盾を感じていない。彼女は現実をあるが儘に受け入れている。それは彼女が神を信じているからである。ディルシーはイースターの特別礼拝で、牧師の「黙示録的」な説教にいたく感動する。彼女は、帰る道すがら感涙にむせびながら、「私は始めと終わりを見た」(371)と言う。家に帰り、例の時計が十時をうつと、「一時だ」と正しい時刻を言い、続けて、「始めと終わりを見た」と再び二度繰り返すのである(375)。

クエンティンは懐中時計の針をむしり取っておきながら、時間を忘れることができず、正確な時刻を絶えず知りたがっていた。ジェイソンは、時間に遅れまいと悪足掻きした一日の終りに、意の儘にできる24時間が欲しいと思う(329)。こうした現実との生き生きとした接触を失った男たちに比べると、ディルシーは充実した現在(時間)を生きているように見えるのだ。

おらの名前は、もうずっとめえからディルシーだったし、みんながおらのことさ とっくに忘れちゃっても おらの名前はディルシーだ。

みんなが忘れてしまって ずっとたったら どうしてディルシーだってことがわかるの、ディルシー、とキャディが言った。

ちゃーんと本に書かれているでよ、嬢ちゃん、ディルシーが言った。ちゃーんと書かれているでよ。

あんた読めるの、キャディが言った。

おらが読まなくなっちゃってええ、とディルシーが言った。おらのために読んでくれる人がいるだでな。おら、ただ、おらここにいますだ、と言うだけでええだよ。(71)

ディルシーの生の意味は信仰に支えられている。彼女の生は、端から見れば、自己犠牲的な生に見えようとも、彼女にとっては充実したものである。ディルシーの現在は過去と未来(永遠)を含む、時間の連続体である。永遠の救済を確信しているので、彼女にとって、現在も過去も意味あるもののようである。とはいえ、ディルシーの現在は、充実した現在を生きることによって、それ以前と以後へ、いままでといまからへの両方向へ開かれていく、というあり方を示してはいない。というのは、彼女の「始まりと終わりを見た」という言葉が含むのは、キリスト教的終末論であり、直線的で不可逆的な時間を前提とした、無限の未来における救済(新しいエルサレム)への希望であるからだ。つまり無限の未来における救済が現在と過去の根拠なのだ。だから、ディルシーに現在を生きる力を与えているのは、ただ、救済への希望

だけだ。彼女は耐え忍んでいるだけだ。しかしながら彼女に体现されているキリスト教の信念は、最終的に、肯定も否定もされていないのである。

ディルシーはしっかりと現実の状況に対処しえ得ているわけでははい。常日頃、母親も及ばない愛情を持って、彼女はベンジーの面倒を見ているのだが、この日は、どうしてもベンジーを泣きやませることができない。ベンジーの呻き声は、第二章と第三章では、殆ど聞こえなかったが、この章ではその出だしから聞こえている。その呻き声は、

絶望的な、ただ長々とした泣き声。それは何の意味もない、ただの音にすぎなかった。あたかも、あらゆる時間と不正と悲しみが、惑星の会合によって、しばしの間、音になったかのようだった。(359)

教会から帰ってからも、ベンジーの呻き声はやむどころか、益々大きくなり、万策尽きたディルシーはラスターを御者に仕立て、古ぼけた馬車にベンジーを乗せて、恒例になっている日曜日の墓参りに行かせることにする。このように、ディルシーの日常はベンジーの呻き声に囲まれて営まれているのが事実なのだ。

ラスターが町の広場で馬をいつもと違う左に向けたので、ベンジーは恐慌を来し、凄じい声で泣き出す。「それは恐怖そのもの、衝撃そのものであり、盲いた、舌を奪われた苦悩そのものであり、また、ただの音でもあった」(400)。これを静めたのは、Mottson から空しく戻って来たジェイソンであった。彼が手荒に馬車の方向を変え、馬車がいつもの進路を進み出すと、ベンジーの秩序感が回復し、たちまち彼は泣きやみ、その目はうつろに、青く澄みわたるのである。この場面は第一章のベンジーの章の終結を思わせ、かくして、この小説は終結において再び発端へ戻るのである。

註

使用したテキストは、William Faulkner. *The Sound and the Fury*. The Modern Library. New York, 1956. 作品からの引用はすべてこの版による。

- 1 Meriwether, J. B. and Millgate, M. ed. *Lion in the Garden*. Random House, New York, 1968. p. 147.
- 2 *ibid.*
- 3 飯島宗享『自己について』(未知谷, 1992年5月) p. 157.
- 4 *Lion in the Garden*, p. 146.
- 5 Duncan Aswell. "The Recollection and the Blood: Jason's Role in The Sound

and the Fury”, Kinney, A. F. ed., *Critical Essays on William Faulkner : The Compson Family*, G. K. Hall & Co., Boston, Massachusetts, 1982, pp. 207-213.

ジェイソンとクエンティンとの間に見られる相同性やパラレルについては André Bleikasten. *The Most Splendid Failure : Faulkner's The Sound and the Fury*. Indiana University Press, Bloomington/London 1976 pp. 145-174.

6 木村敏, 『時間と自己』中央公論社, 1982, pp. 26-31.

7 同上, p. 68.

8 Joan Williams. “In Defense of Caroline Compson”, A. F. Kinney ed., *Critical Essays on William Faulkner*. pp. 402-407.

9 Cleanth Brooks. *William Faulkner : The Yoknapatawpha Country*. Yale University Press, New Haven and London, 1963, p. 447.

“Appendix ; Compson : 1699-1945”, William Faulkner. *The Sound and the Fury*, the Modern Library, 1956, p. 422.

10 *Lion in the Garden*, p. 244.

11 William Faulkner, *As I Lay Dying*. Random House, New York, 1964, p. 161.

12 拙論「Sanctuary の Horace Benbow について」金沢大学文学部論集文学科編第 10 号, 1990 年 2 月.

13 Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File : Letters and Memories, 1944-1962*. New York, The Viking Press, 1966. p. 31.

14 Hagopian, J. V. “Nihilism in Faulkner's The Sound and the Fury”. Arthur F. Kinney ed. *Critical Essays on William Faulkner*, p. 198.